明日を語ろう!

北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO

北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●新たな技術への挑戦と地域の農業を守る取り組み

担い手不足の解消も視野に積極的なスマート農業の導入で省力化と高品質な生産体制を両立。

［せたな町］
株式会社よし田農縁
代表取締役
吉田優さん

●生まれ育った地域の農業を守りたいと、コントラクター事業や担い手育成にも熱心に取り組む吉田さん。周囲からの信頼も厚く、せたな地区水稲部会長、せたな町農業運営委員など、数多くの役職を務めています。

●3年前に導入した8条のGPS搭載田植機。これからはICTなどを活用したスマート農業が盛んになる、と吉田さんはいいます。

●社名を「よし田農縁」にしたのは、「よい縁がありますように」という奥様のアイデアから。

新しい技術を取り入れ効率的な営農体制をめざす

北海道の西端に位置するせたな町北檜山区。5月中旬に訪問した吉田優さんの田んぼでは、息子の和矢さんが直播適性品種「えみまる」の播種作業を行っていました。

吉田さんが水稲直播を取り入れたのは8年ほど前のこと。大学で農業を学んだ和矢さんが「直播をやってみよう」と始められたそうです。現在、直播栽培の面積は乾田と湛水をあわせて8ヘクタール。水田全体のうち、約3分の1を占めるまでになっています。「直播を導入したことで、育苗の手間が省け、農作業の負担がかなり軽減できました。田植えや収穫の時期を移植栽培と分散できることも、少人数の家族経営にとってはメリット」と直播を取り入れた効果を語ります。

吉田さんは会社員を経て、30年前に農家の3代目として家業を継承しました。「一度会社勤めを経験したことで、頑張った分だけ報われる農業の魅力を再認識できた」と振り返ります。当時は水稲栽培はあまり盛んではなく、大豆やそばなどの畑作が中心。経営面積も5、6ヘクタールほどでしたが、離農地などを引き受けることで徐々に増えていき、水田26ヘクタール、大豆11ヘクタール、そば7ヘクタール、ブロッコリー1ヘクタールを栽培するまでになりました。

45ヘクタールもの農地の維持には、農作業の省力化や効率化が不可欠です。そのため3年前には自走式の田植機を購入し、労働力不足を補ってきました。「現在はすべての田植え作業を息子1人で行っています。私は新しい機械や技術のことはわからないので任せきり」と笑いますが吉田さん自身も、20年以上前に無人ヘリコプターのオペレーター資格を取得するなど、先進的な取り組みを行ってきました。「これからはスマート農業の時代。操作性の高いドローンなら、さらに省力化が図れるのでは」と、新時代の農業に期待を寄せます。

質の高いものを作り続ければ評価は必ずついてくる

現在、吉田さんは「ゆめぴりか」「きたくりん」など、複数の水稲品種を栽培していますが、やはり思い入れがあるのは道南発のブランド米である「ふっくりんこ」だといいます。昨年までは、道南の生産者で組織される「函館育ちふっくりんこ蔵部」の部会長を務め、質の維持や生産者間の連携強化に尽力。厳格に定められた栽培方法や品質基準を守り、農薬と化学肥料を減らしたプレミアム米の栽培にも取り組みました。

「支えになっているのは、少しでもおいしい米を食べてもらいたい、という思い。良いものを作り続けていれば、ちゃんと評価はついてくるはずです」

質の維持には苦労も伴います。吉田さんの水田がある地域は風が強く、6月の東風で稲が倒れてしまうことがあるそうです。防ぐには深水にするしかなく、こまめな水位の確認が必要になります。また、離農地を引き受けてきたことで農地が点在し、移動に時間がかかることも負担になっています。現在は和矢さんと手分けして見回っていますが、効率性を高めるために、水位などを遠隔で管理できるシステムの導入も検討しています。

●和矢さんが播種作業をしている間、吉田さんは苗を植える水田の代かきを行います。直播を取り入れたことで、省力化と作業時期の分散が可能になりました。

●田植え作業は後継者である和矢さんが担当。
湛水直播では水を入れた田んぼに直接種をまいていきます。

「近年、新たな地域ブランドとして、糖度の高い『せたな潮トマト』が注目されています。トマト栽培をやってみたいという人がいれば、夏の間、育苗用のビニールハウスを貸し出すことも考えています。そういう試みをすることで、新たな農業モデルをつくることができればいいですね」

吉田さんは20年ほど前から収穫を請け負うコントラクター事業にも力を入れてきました。昨年はコンバインを更新し、事業を強化。また、法人化することで経営責任をより明確にし、地域から信頼される体制を築いています。高齢化や後継者不足という課題を抱える地域において、助け合いながらなんとか農業を存続させたい、というのが吉田さんの願いです。

「法人化をしたので、次は若い従業員を雇用するのが目標。経営は息子に任せて、自分はおいしいトマト栽培に挑戦してみたいですね」と今後の展望を話す吉田さん。早く引退したい、と言いながらも、楽しそうに新たな構想を話す姿が心に残りました。

高齢化が進む地域において農業を守るためにできること

農家の高齢化が急速に進む中、せたな町でも担い手の育成が課題になっています。吉田さんは地域の担い手協議会の副会長として、新規就農希望者の研修受け入れにも取り組んでいます。昨年からのコロナ禍によってPRイベント等は中断していますが、町と連携して就農研修サポートのWebサイトを立ち上げ、積極的な情報発信を始めました。

●10棟ある育苗用のビニールハウス。夏の間は使わないため、新規就農を希望する人に、トマト栽培用ハウスとして貸し出すことも考えています。